

ミステリーブームの軌跡をたどる

推理文壇戦後史

山村正夫

ミステリーブームの軌跡をたどる

推理文壇戦後史

山村正夫

推理文壇戦後史

昭和48年10月15日 初版発行

定価七八〇円

著者 山村正夫

発行者 瀬川雄章

発行所 株式会社 双葉社

郵便番号 一六二

東京都新宿区神楽坂一の八

電話東京(268)五一一(代表)

振替東京 一一七二九九

印刷 亨有堂印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします

© 山村正夫 1973

0095-500042-7336

まえがき

一般に回顧録めいたものは、功成り名を遂げた老大家が、晩年になってから筆を執るものと相場がきまっているようだ。

現にその種の労作としては、江戸川乱歩先生の「探偵小説四十年」があることだし、横溝正史先生も昨年、自伝風の随筆集「探偵小説五十年」を上梓されたばかりである。また正史というべき日本推理小説史の戦後篇は、いづれその道の専門家である中島河太郎氏が執筆されることであろう。さらに側面史や裏面史にしたところで、ほかに然るべき適任者は、大勢おられることと思う。

その意味では、私のようなまだその業の半ばにある作家が、本来の創作の仕事を怠けてこうしたものを書くのは、あるいは烏滸がまし過ぎるかもしれない。それは批判を受けるまでもなく、私自身が一番よくわかつていることである。

しかし幸か不幸か、十代の少年時代から推理小説畑の人間になった私は、戦後二十余年の推理小説界の変遷と、私個人の年齢的成長とがそのままひとつのものになっている。作家としては早過ぎた出発が決してプラスにはならず、かえってマイナスになったくらいだが、その反面、この四半世紀にわたる推理小説の歴史が、一人の人間の少年期から大人になるまでの精神の形成に、

どのような影響をおよぼしたかという点を考えれば、貴重な体験といえないこともないような気がするのだ。いわば私は、推理小説界という大店に丁稚奉公をした人間といってもいい。したがって青春時代の郷愁が、そのまま戦後のミステリー界の復興期の思い出につながっているのである。そうした目で、推理文壇の側面から見た記録をまとめておくことは、将来、何かの資料として役立つことがあるのではなからうか。

また、私は比較的、記憶力はいい方だが、これ以上年数が経ち過ぎると、それも次第に薄れていくだろうし、ひとりよがりにあのときはこうだったと思ひこんでいても、そのときどきの関係者に事実を確かめてみなければあやふやなこともかなり多い。ところが、老年になってからは、新たに取材をして確かめたくても、もはや私自身にその根気がなくなるかもしれない。第一、関係者のすべてが、長寿を保たれるとはかぎらないのである。

その証拠に私はこの記録を纏めるに当って、新聞記者時代の昔に還り、取材だけはマメにおこなったつもりだが、せっかく親切に御教示いただいた方々が、不幸にも次々に病や事故で倒れられて、鬼籍に入られる事態に遭遇した。乱歩先生をはじめ、大下宇陀児先生、木々高太郎先生、楠田匡介氏、白石潔氏、田井真孫氏等みな然りである。私がもしも、この側面史の執筆を先に延ばしていたとしたら、いま挙げたような方々からは永久に貴重な話を伺えなかったに違いない。私は正直いって、それらの諸先輩の生前に取材ができたことを、しみじみよかったと痛感している次第だ。

さらに、現在、日本の推理小説界は種々の意味の反省期にあるが、この機会に戦後の歴史にひと区切りをつけて、人物史や事件史のメモをいちおう整理しておくことも、悪くはなからうと思

うのである。私が日本推理作家協会の機関誌『推理小説研究』に、「戦後推理小説側面史」の連載の稿を起したのは、以上のような意図によるが、本書はその稿と『小説推理』の昭和四十六年七月号より四十八年五月号まで二十一回にわたって連載した「戦後ミステリー界裏話」をもとに、新たに改稿・加筆したものだ。ただし、残念なことには、枚数の都合で、昭和二十一年から昭和三十一年ぐらまでの、せいぜい十年間分の各作家のエピソードや事件史の思い出し収録できなかった。

それに、固苦しくなることを極力避けたため、あるいは筆が走り過ぎたり、妄言や不遜な叙述があるかもしれないが、その点は平に御容赦願いたい。あらかじめお断りしておくことにする。

一九七三年七月三十一日

山村正夫

目次

はしがき

敗戦混乱期における推理文壇復興の兆し (13)

○疎開先から帰った江戸川乱歩と、自殺を決意していた海野十三、

大下宇陀児 13

『宝石』創刊の頃 (18)

○詩と推理小説の新雑誌 18

○銃砲店で発足した岩谷書店 20

○銀髪の若さま侍、作家編集長の城昌幸 26

当時の戦前派推理作家たちの動静 (32)

○はじめて出会った「人間椅子」の作家 32

○横溝正史と戦後初の本格巨篇「本陣殺人事件」の生まれるまで 35

○疎開先で文化活動の推進役となった悪魔派の詩人渡辺啓助と、

鬼才小栗虫太郎の急逝 40

○発表のあてもなく書き下した角田喜久雄の「高木家の惨劇」 42

○池袋の顔役だった大下宇陀児と、木々高太郎の屋根裏部屋の書齋 44

第一次ミステリー・ブーム起る……………(46)

○新鋭推理作家続々登場 46

○戦後派五人男と宿命的ライバルの高木彬光、大坪砂男 50

日本探偵作家クラブの誕生……………(54)

○推理作家に煙たがられた青酸カリグループ 54

○初めての犯人探しゲーム、ネギを背負った鶏の賞品 59

SF界の大先達、海野十三の急逝……………(61)

○恨みのストレプトマイシン 61

本格派の驍将、高木彬光

..... (65)

○ 神秘論者のトリック作家 65

○ 「刺青殺人事件」と刺青趣味 69

探偵小説に対する根強い偏見

..... (73)

○ 限られた発表舞台、当時の探偵雑誌のこと 73

○ 純文学作家の反応、故・十返肇と近藤啓太郎のこと 79

本格派と文学派の対立

..... (86)

○ 抜打ち座談会の真相 86

○ 推理文壇分裂の噂 91

同人誌『鬼』の創刊

..... (96)

○ もののしい巻頭言 96

○ 推理作家の最初の溜り場 100

○増頁後、九号で終刊
102

あとむF氏の事件

○推理小説を地で行った意外な正体
109

個人雑誌『黄色の部屋』と地方同人誌

○十三号まで発刊された異色の研究誌
115

○アマチュア愛好クラブと大学ミステリー研究会
117

白石、山田、香山、島田の諸氏のプロフィール

○奇人幽鬼太郎のこと
121

○推理文壇きっての酒豪、山田風太郎
126

○海鰻荘の主人、香山滋
133

○事件記者の生みの親、島田一男
137

(121)

(115)

(109)

百万円コンクールの登場作家

○二十代の変わり種だった大河内常平 146

○推理文壇は花盛り、飛鳥高、岡田鯨彦、三橋一夫、角田実の諸氏 152

○純文芸誌『新潮』が推理小説特集 153

江戸川乱歩の人間像

○色紙「うつしよはゆめ夜のゆめこそまこと」 156

○思い出深い乱歩邸の座敷 160

○安房鴨川の一夜、江戸川、白石両氏の私小説論議 163

○恒例の新年会、傑作だった楠田匡介の福引 167

文学派の総帥、木々高太郎

○松本清張も出席した木々邸の新年会 174

○美人の令嬢と懐かしのカルタ会 176

(146)

(156)

(174)

捕物小説界の大御所、野村胡堂

(179)

○ 推理作家の捕物帖ばやり

179

○ 銭形平次の生まれた家

182

○ 音楽評論家あらえびすのこと

183

○ 人並みはずれた几帳面な性格

185

捕物作家クラブのこと

(191)

○ 半七塚の除幕式や忍術の会、探偵作家クラブと共催の多彩な行事

191

○ 半天に鉢巻姿のオンパレード

193

大坪砂男との出会い

(198)

○ 独特の風格の苦勞人

198

新宿青線時代

(202)

○ 特飲街に住む推理作家、朝山蜻一

202

○ 花園街の常連メンバー

204

○連日連夜の乱痴気騒ぎ 207

○みどりさんの店 211

孤高の推理作家（再び大坪砂男のこと）……………(215)

○トランクを机がわりの執筆生活 215

○名作「天狗」誕生のいきさつ 218

○赤貧洗うがごとき生活 221

魔童子論争……………(226)

○大坪砂男の果し状 226

○大下宇陀児の関西探偵作家クラブ批判 233

○魔童子の正体、あつという意外性 242

砂男眠る……………(245)

○稿料の前借魔 245

○放蕩無頼に徹した文学派作家の死 250

幽霊の出る三畳間

○新進翻訳家だった頃の都筑道夫氏 255

アマチュア同人誌の雄『密室』

○有力執筆メンバーの一人だった鮎川哲也 259

○狩久発案の後向き劇団 264

○マンスリーへの転身 269

推理作家の文士劇

○ラジオドラマ「びっくり箱殺人事件」のこと 275

○江戸川乱歩一座 279

○「ナイル河上の殺人」の吹き替え出演 286

(275)

(259)

(255)

装幀・重原保男

敗戦混乱期における推理文壇復興の兆し

○疎開先から帰った江戸川乱歩と、自殺を決意していた海野十三、大下宇陀児

戦時中、東京の池袋には、国電の駅をはさんで、西口に江戸川乱歩、東口に大下宇陀児の両大家がそれぞれ居をかまえておられた。

奇しくも、乱歩先生が池袋丸山町会の副町会長で、大下先生は雑司ヶ谷五丁目町会の町会長であつた。

だが、昭和二十年四月十三日夜の大空襲で大下邸は全焼して、先生は半地下壕を町会事務所兼住いにしておられたが、立教大学の構内にあった江戸川邸の方は、付近一帯が焼夷弾にやられて焦土と化したにもかかわらず、奇蹟的に一軒だけボツンと焼け残つた。といつても、庭園には乱歩先生が自ら設計された半地下式木造待避壕が砲撃のごとく築かれ、空気抜ききの土管が二箇の砲門のごとく座敷をにらんでいて、さらにその上に、家庭菜園のカボチャやジャガイモ、里芋、トウモロコシなどが、縁側のすぐ前までおおいつくすという凄まじさだった。

この家へ、乱歩先生が疎開先の福島県保原から帰京されたのは、終戦直後の昭和二十年十一月七日のことである。推理文壇の大御所も、長く大腸カタルを患われたのと栄養失調のために、骨

と皮ばかりに痩せ衰えておられた。先生自身が書かれたものによれば、下腹部を手でおさえてみると、何か固いものにさわる。癌ではないかと心配して、医者に調べてもらうと、その固いものは背骨の一部であることがわかったというほどだ。後年の恰幅のいい先生しか知らない私には、およそ信じられないくらいである。

半年ぶりで家に落ちつかれた乱歩先生は、さっそく大下先生夫妻と水谷準先生夫妻を招かれて、牛肉のスキ焼きと生ビールで、帰京挨拶の宴会をひらかれた。

「おい、いよいよ探偵小説の復興する 때가 きた。これからはきっと盛んになるぞ」

先生は好物の肉をつつかれながら、熱っぽい口調で語られた。

戦時中の作品としては、わずかにスパイ小説(『日の出』連載の「偉大なる夢」と小松竜之介の筆名による少年向きの科学読物(知恵の「太郎を主人公にしたもの」)があるだけで、事実上、筆を折られたも同然だった先生である。町会の副町会長の後、もっぱら翼賛壮年団の豊島区の副団長、大政翼賛会の支部事務長などの役職に就かれて、国策遂行に率先して協力されていたので、作家生活からはすっかり遠ざかっておられた。

それだけに、ふたたび創作の筆を執ることができるといふ期待で、先生の意欲も大きかったのに違いない。

「これからは、われわれの時代だ。なあ、君らもひとつ、探偵小説界再建の音頭取りになってくれよ」

意気軒昂の先生はなおも気炎をあげられたが、大下、水谷の両先生はいっこうに乗ってこられなかった。特に大下先生は元気がなかった。それも無理はなかったのだ。終戦の大詔が下って、